

Vol. 132 2016.6.3

理事長トーク Top Interview

慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスにて
「強靱健康社会のデザイン」の授業が
スタートしました。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



（仮称）湘南藤沢記念病院の建設地では、現在基礎工事が進んでおり、2017年秋の開院に向けた準備が着々と進んでいます。そこで今回、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、SFC）の「未踏領域のデザイン戦略」という講義の中で、学生たちが新病院をコアイメージとして、近未来の健康社会をどのようにデザイン（設計）するかというテーマの授業が行われることとなり、2016年5月30日に行われた第一回目の特別公開講義に講師の一人として参加しました。

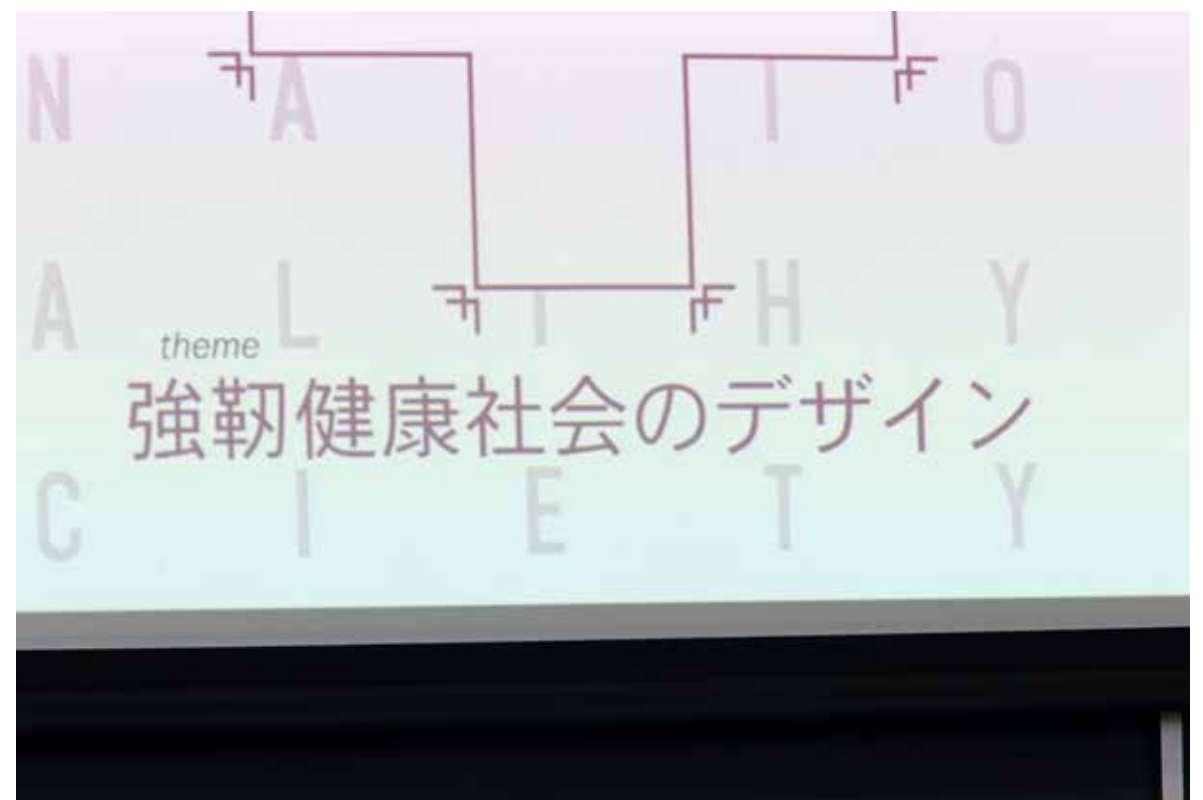


「未踏領域のデザイン戦略」とは、2012年に始まった「今までデザインという概念がなかった領域で、デザインので何か課題解決ができないかを探る」講義で、これまで「防災のデザイン」や「オリンピック・パラリンピックのデザイン」「キャンパスライフのデザイン」をテーマに設定し、学生が様々な角度からデザインやコミュニケーションの可能性を探り、最後にそのグループワークの成果が発表されてきました。

講義の担当教授としては、日本を代表するアートディレクターである佐藤可士和先生（慶応義塾大学環境情報学部特別招聘教授）を筆頭に、笈康明先生（慶応義塾大学環境情報学部准教授）、オオニシタクヤ先生（慶応義塾大学環境情報学部准教授）、村井純先生（慶応義塾大学環境情報学部長兼教授）と、錚々たるメンバーが担当されています。



今年度の講義では来年開院予定の（仮称）湘南藤沢記念病院を題材に、「強靱健康社会のデザイン」をテーマとして、学生たちが授業に取り組むこととなりました。その第1回特別公開講義として、（仮称）湘南藤沢記念病院の準備に携わる3人、健育会グループ理事長であり、慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科特任教授である私と慶應義塾大学医学部眼科教授の坪田一男先生、開設準備室長の松本純夫先生が講師として招かれ、日本の医療の現状や（仮称）湘南藤沢記念病院の役割・準備状況等について講義を行いました。



「未踏領域のデザイン戦略」

2016年度 第1回特別公開講義

1. 本授業について (15分)

村井純（慶應義塾大学環境情報学部長兼教授）

佐藤可土和（慶應義塾大学環境情報学部特別招聘教授）

2. ポジティブサイコロジー、アンチエイジング、眼科の立場から (20分)

坪田一男（慶應義塾大学医学部眼科教授）

3. 健育会、医療・介護関係施設経営の立場から (20分)

竹川節男（健育会グループ理事長、慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科特任教授）

4. 湘南藤沢記念病院をきっかけとしてめざすべきこと (20分)

松本純夫（（仮称）湘南藤沢記念病院開設準備室長、

独立行政法人国立病院機構 東京医療センター名誉院長）

5. Q&A (15分)

大学野球の早慶戦が開催される中、他の授業が休講という中でわざわざこの講義のために約50名の学生が集まり講義が始まりました。

はじめに佐藤先生から、「ずっと医療というテーマを扱いたいと考えていましたが、今年、病院建設が始まり、タイミング的にとってもいいのではないかとということで、取り上げることにしました。」など、今年度のテーマを「強靱健康社会のデザイン」とした趣旨についてなどご説明いただきました。

また村井先生からは「健康というのは、我が国の中でとても重要な課題です。また、「神奈川県藤沢市に健康をテーマに人を呼んで街を作ろう」という構想があります。その中のキー施設となる病院建設が始まったところで、まだ、皆さんが考えたことを病院設立の前に入れ込むこともまだ可能なタイミングです。大学で今年このテーマを扱う意味はとても大きいと思います。皆さんの活躍に期待します。」と、今年の授業の説明と学生への期待が語られました。

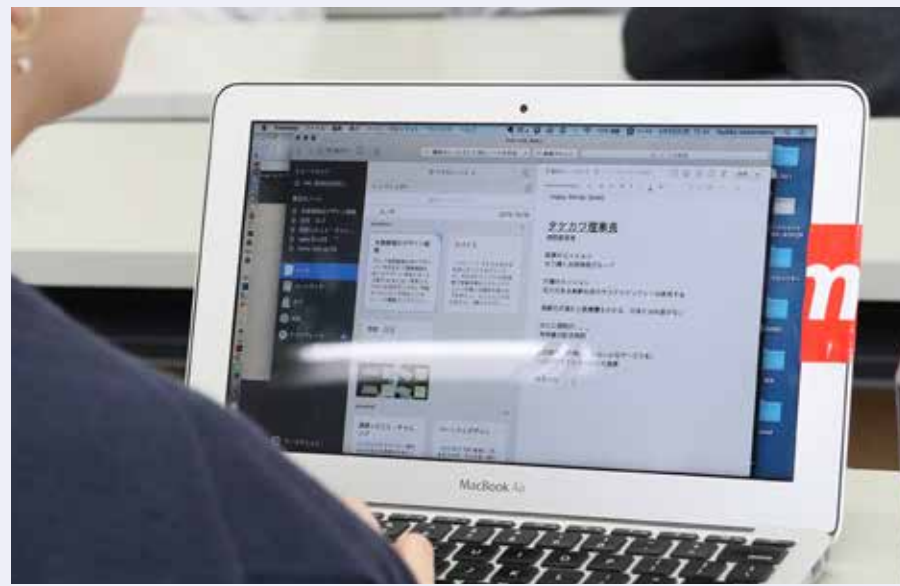


その後、まず坪田先生からの講義が行われ、「今、医療に求められているものは、病気になったら治すという従来のやり方から、病気にならないようにする、さらに健康にするというパラダイムシフトである。究極の予防医学であるアンチエイジング医学はこの領域に大きな貢献をなすと考えます。今回の授業でも、一つの視点としてみなさんの頭に入れ、今までの医学ではやってこなかった視点を持って取り組んで欲しい。」とのお話がありました。

その後、私と松本先生から、学生の皆さんに向けて講義を行いました。

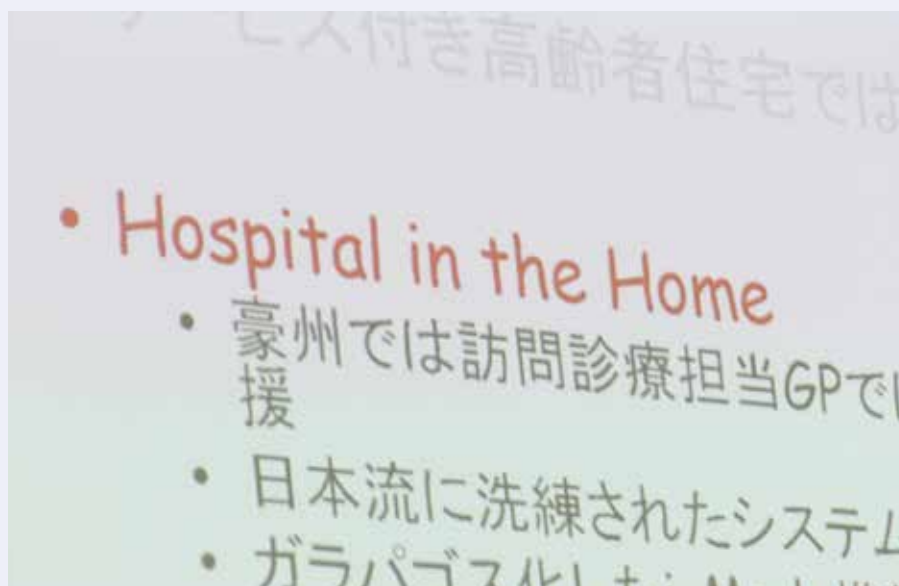
竹川理事長 講義（要旨）

- ・日本の社会が抱えている問題として、平均寿命と健康寿命の差がある。その差は、男性で9.13年、女性で12.68年。この差が悲劇を生み出す。この問題をどうやって解決するか。
- ・まず健康寿命を延ばすこと。そして同時に、平均寿命が本当に必要な寿命なのかということも考えなくてはならない。日本の場合、ご飯が食べれなくなったら胃瘻というお腹に管を入れる処置を行って、強制的に生かしている場合もある。日本人には宗教がないために死生観があいまいである。日本人の意識を変えていく必要があると考える。
- ・もしお金があれば、様々な問題を解決するのは簡単かもしれないが、今の日本は財政的にはきわめて厳しい状況にある。一方、高齢者が増えると病気が増えるので医療費も大きくなる。お金がない中で、様々な問題をどうやって解決していくか。それを考えることが、最終的には日本人の幸せにつながると思う。
- ・その象徴となって欲しいと思っているのが、（仮称）湘南藤沢記念病院である。ここから新しい取り組みを発信して、世界に一つの方向性を示していきたいと考えている。
- ・新病院には、「藤沢市から期待されている地域救急医療への貢献」「神奈川県から期待されている慢性期医療やリハビリテーションの実施」「この地区（遠藤地区）にお住いの皆様の生活の充実度を上げるITを駆使したサービスの実施」が期待されている。
- ・新しい病院を、健康社会を作るモデルの病院にしたいと考えている。この授業で皆さんの考えた成果に期待する。



松本先生 講義（要旨）

- ・ 藤沢市の高齢化率は2010年で23%、2025年には25%を超え、2040年には32%と推定されている。4人に1人以上65歳以上の人がいると突然社会は停滞し始める。その課題をどうやって解決するかが問われている。
- ・ 私は内閣府の医療・介護におけるITの活用についての委員も拝命しており、電子カルテやインターネットを使って、なんらかの健康寿命を延ばす取り組みをしていきたいと考えている。
- ・ 近年、スマートフォンは当たり前のように使われているが、75歳以上の高齢者でガラケーの携帯以上のものを使える人はあまりいない。しかし、テレビは皆が見る。そこで、インターフェイスとしてテレビを活用することを考えており、様々な実証実験は進んでいる。
- ・ 「Hospital in the home（ホスピタル イン ザ ホーム）」という言葉がある。高齢化、核家族化が進行し、独居世帯が社会問題化している中、在宅で家にいながらネットを介して病院とつながる見守りサービスである。
- ・ テレビから「お元気ですか？」と質問され、例えば元気なら青、相談したいことがあれば緑、体調が非常に悪ければ赤を押して、それでコールセンターと直結し、緊急な場合は救急車の手配まで行うというホスピタル イン ザ ホームのような取り組みを藤沢市では是非展開したい。また、家庭の中の体重計や体温計などのツールがBluetoothで繋がり、病院に情報を送って診察できるようなものを是非構築したいと考えている。
- ・ この講義の中から、さらに新たな健康寿命を延ばす施策が出てくるかもしれない。期待している。



この後、質疑応答の時間が設けられました。佐藤先生をナビゲーターとして「デザインするときのターゲットをどのように考えれば良いか」「将来、日本人の死亡原因は変わっていくのか」「今回の授業を通じて新しい医療制度を設計していく上で、医療従事者への教育で考慮すべき点はあるか。」など、様々な質問をお受けし3名の講師がそれぞれお答えしました。医療・介護施設の経営者として現実を直視した厳しい意見を述べる私、アンチエイジングの研究者の立場から明るくポジティブな意見を述べる坪田先生、議論の種となる各種エビデンスを紹介する松本先生と、講師それぞれの立場からの意見で議論しながら回答し、笑いも溢れる楽しい質疑応答の時間となりました。



講義の最後に、村井先生より「今回の授業で素晴らしいアウトプットがまとまれば、しっかりと成果を発表する機会を医学部のある信濃町キャンパスで設けるので、それを目標に頑張ってください」とのお話がありました。私は、そのアウトプットをまさに今建設が進んでいる（仮称）湘南藤沢記念病院に取り入れることも可能であると考えています。学生の皆さんには大いに頑張ってくださいと思います。

